

冬

は音楽の季節だ、と私は思う。窓はびったり閉められて、ガラス越しに虫の音や鳥の鳴き声も聞こえてこない。春から秋までずっと道路で遊びまくっていた子どもたちも屋内へ消え、空気は澄み切って割れそうなくらい張り詰めている。部屋の外も内も単に静かというよりも、静謐である。かじかみ、籠りがちになる冬ほど音楽に没頭できる季節はない。

こんな時、グレン・グールドが弾くシベリウス作「三つのソナチネ」をかけ、無心に最後まで聴き惚れる。音楽に北欧の景色を掻き立てられ、窓の外を杲然と眺めていると、陽射しに照らされた道向こうの屋根瓦は、東京ではなく、どこか遠い土地の風景か、と夢想してしまう。暖房がききすぎている中央線の車内に縮詰めにされている、佐藤聡明という作

曲家の「ルイカ」をヘッドフォンで聴いていたら、コートの重さとか、マフラーの暖かさとか、まだ日没が早い空の色とか、すべてがこの音楽と共鳴しているような気がして、不愉快なラッシュ時の電車もその日だけは曲が終わるまで居心地がよかった。音楽はいつも聞き手をどこか遠いところへと誘^{いざな}ってくれるから、動きが取れない空間、季節ほど、効き目が強い。

ところで、北陸の小松という町に、私は以前ホームステイしていたことがある。ホームステイ先のお祖父さん、田中さんは趣味と言いながら素晴らしい作品を創る陶芸家・書道家で、私たちはとても気が合い、私は田中さんにいろいろなことを学んできた。芸術のこと、美学のこと、字のこと、昔のこと。そしてこの間、ちよつと顔を見に行つた折に、たま

たま話題が音楽の方に流れた。

戦時中、友人と集まり手巻きの蓄音機でジャズを流し、踊つたという。最初は使い捨ての鉄針を使っていたが、そのうち鉄針が禁止され買えなくなつてしまったので、自分たちで竹針を作つたそうだ。竹針だと音は小さくなるが、雑音の少ない柔らかい音色を醸し出すという。竹の音に合わせて、弾圧を受けていた「敵性音楽」に夢中になり、レコードが止まるまで踊りつづけた若き日の田中さんを、私は想像してみる。

小松のどこで、どんなダンスを仲間と踊っていたのだろうか。そして、それはどんな季節であつたのだろうか。☺

竹針の蓄音機

マイケル エメリック
Michael Emmerich

翻訳家・日本文学研究者